
クリンプトン物語

石川 乃牡硫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリンプトン物語

【Nコード】

N8904H

【作者名】

石川 乃牡硫

【あらすじ】

アンドロイドを作っている会社『クリンプトン』。そこで働いていた八木さん。その娘の『舞』を巻き込んだアンドロイドの『ココロ』をテーマにした物語です。

第一話 不安定な心

2050年日本、クリンプトンという会社があった。

そこでは人工アンドロイドが作られていた。

その研究者の一人に八木さんという人がいた。

10年も前の話である。

八木さんはその会社で作られた初めてのアンドロイド『リン』をモデルケースとして自分の家の家族として受け入れた。

その当時、八木さんの家には娘さんがいて、病弱だった。

そして子供が小さい頃に母親は病気で亡くなっていて、現在は家族2人で過ごしていたのだった。

娘の病弱の事や家事全般の手伝いがほしかったのもあって、八木さんは喜んでそのアンドロイドの『リン』を家族として受け入れたのだった。

受け入れた当初、戸惑いがあった。

その当時『心』がまだ開発段階途中で、入れると危険だと判断され、『リン』には『心』が入ってなかった。

『心』を持たない手伝いロボットとしか最初のうちその父親は思っ
てなかった。

それでも月日は流れ、娘はそのロボットに心を開くようになって
いった。

会話はほとんど一方的で、言葉のイントネーションも単調。

それでも娘は楽しくて仕方がなかった。

父親は良い実験データが取れたと嬉しがっていた。

9ヶ月が過ぎた。

娘は心を閉ざした。

アンドロイド『リン』が動かなくなってしまったからだ。
製造者でもある父親はどうしようか考えた。

そこで娘にこう言った。

「新しいのに変えようか？」

娘は言った。

「この子じゃなきゃいや！」

父親はすごく悩んだ。

そうこうしているうちに1年が過ぎようとしていた。

父親はある考えを実行した。

それは、新しいアンドロイド『ミク』を家族として受け入れる事である。

これには考えがあった。

1つは娘の心の支えとなるようにと、2つ目は忙しい父親に代わって『リン』の修理できる部分は『ミク』が行う、そして3つ目はアンドロイドにとってクリンプトンが考えたとある大きな実験の場所として自分の家を選んだのだった。

『ミク』が来ての最初の一ヶ月、『リン』は父親や『ミク』の修理により何とか動くようになった。

しばらくはだましだまし2体のアンドロイドを使っていた。

でも、もうそれも限界だった。

『ミク』が『リン』を修理する時間はかなり膨大な時間をとるようになってきたからだ。

父親は2つのことを実行しようとした。

『リン』を廃棄処分すること。

アンドロイド『ミク』に初めて、アンドロイド史上初の『心』のプログラムを入れること。

この『心』は前から考えてたが、『心』をアンドロイドにインプットするのは初めての試みだった。

まず先に父親は『心』のインプットを実行した。

それまでの『ミク』がやってきた事…『リン』の修理の記憶や娘とのほぼ一方通行である記憶…などが『心』でつながった。

それはとても不安定だった。

そこで父親はしばらく『ミク』を研究所に戻し、『心』が安定する時を待った。

それまで『リン』で何とかしようと考えたのであった。

『心』が安定するのは意外と早く3日で落ち着いた。
なので『ミク』を自分の家に戻した。

『リン』は『ミク』の手厚い修理のかいもあってだいぶ安定していた。

『ミク』が家に戻ってしばらく経った時、娘の誕生日があった。

『心』を持った『ミク』は何かしようと自分で考えた末、『リン』と一緒にベースデーソングを歌う事にした。

ただ、アンドロイドは歌を歌う事を得意としていなかったため練習には時間がかかった。

こっそり練習するのは大変だった。

誕生日当日、『ミク』と『リン』で歌を歌った。

娘はとても喜んだのだった。

それからしばらくして、父親は娘と『ミク』に『リン』の廃棄を告げた。

娘は泣きじゃくった。

『ミク』は・・・ココロが動いた・・・。
今までしてきた事が思い浮かんでは消えた・・・。
涙は流せない・・・。悲しいのに泣けない・・・。

それは心を持つものにとってどんなに辛いことだろうか。

それから幾日経ち、『心』を持った『ミク』は決心した。

『リン』のデータを壊し、その後自分のデータも消去することを
・・・。

これで悲しみは生まれない。

悲しみの元凶・・・自分自身、アンドロイドそのものが消えるの
だから・・・。

そして実行。

2体のアンドロイドはただの鉄くずとなった・・・。

父親は心の不安定さを見抜けない自分に絶望した。

娘は最初、自分を責めていたが、やがて父親にこう願うのだった。

「わたしにまたアンドロイドを作ってください。」

それから2年後、『心』を持った2体のアンドロイド『レン』『ルカ』を購入したのだった。

その2年の間、いろんな事があった。

『心』の不安定を解消するためにある程度落ち込んだらいったん
回路を閉ざすつくり切り替えた。

それで自己の消去をできないようにした。

初代アンドロイド『リン』をベースに父親の思考を織り交ぜて作
った『レン』、2代目アンドロイド『ミク』の2次保存メモリによ
り消去されてなかったやさしい擬似心をモデリングした『ルカ』。

その2体は購入の一年前に製品化され販売しており大変な反響を

受けていた。

そしてまた春が訪れる…。

第二話 新しい家族との生活

春、それは始まりの季節。

たくさんの新しい命が生まれる季節。

八木家にも新しい家族が2人来た。

『2人』とは間違いかな？正確には『2体』だ。

時は少し前にさかのぼる。

娘はアンドロイドという2体の友を失ってふさがちになっていた。

父は2ヶ月間仕事を休んだ。

娘が心配だったからだ。

そうそう仕事を休んでいられるわけもなく娘の心も安定してきたので、家政婦を入れて仕事に復帰したのだった。

復帰してから1ヶ月、死ぬほど頑張った。

そして2体のアンドロイドを完成させた。

『レン』と『ルカ』である。

その2体はクリンプトン社製のアンドロイドの中で人との対応の反応が非常に良く、ちまたの評判も上場だった。

そしてその2体が販売を開始してから1年が経ち、周りの評判が良いという事もあつて家政婦を解雇して、2体を買って家に家族として受け入れる事にした。

様は周りを毒見役にしたのである。

ま、それは置いて、2体の販売から一年。春…。

親子2人とアンドロイド2人の生活が始まる…。

2043年4月1日、エイプリルフル。

八木家の一日が始まった。

娘の舞はまだ爆睡中。

その日の舞は違ったリズムの音で目が覚めた。

(トントントン)

舞：うー。眠い。…なんだろういつもより早い包丁の音…？

レン：おはよう！

舞：わ！誰？

父親：びっくりしたかい？勝手に部屋に入ってますまんが。

舞：それはいいけど。で？この男の方はどちらさんですか？

父親：声を聞いて察せれないかい？

舞：んー？…声？

レン：おはようございます。

舞：ん？アンドロイドっぽい声…。

父親：そうだよ。今日からうちに来てもらったアンドロイド、レン君だ。

舞：あー、そうなの…。んー。

(トントントン)

舞：あれ？お父さんいるのになんで包丁の音がするの？しかも早い音…。

父親：行つて確かめてごらん

娘はのっそりと台所に向かった。

舞：あれ？どちら様ですか？

謎の人：私はあるじさまに購入され、八木様の家に今日来たアンドロイドのルカです。

舞：2人も？！びっくり。

そうこうしていると父親とレンが来た。

父親：舞を驚かせようと思ってだまってたんだ。

舞：そうなの？まあ、いいけど。お父さんはそういつたいたはずら得意だから慣れてる。

レンがルカのところに行った。

レン：味見してあげるよ。

ルカ：いいわよ、しなくて。

レン：いいから。

強制的におたまと小皿で味見をするレン。

レン：しょっぱくないか？

ルカ：うるさいわね。あなた味覚変なんじゃないの？

レン：舞様に味みてもらおうよ。

ルカ：そうね。舞様どうぞ。

舞：ん。

味見中。

舞：ちよつとしょっぱい。いつもうちは薄味だから。

ルカ：すいませんです。：私、味覚音痴かな；；

舞：うんうん。そんな事ないよw 美味しいよw ちよつとしょつ

ぱいだけだから。

ルカ：すいません。

父親：昔いつも料理を作ってたのはリンだからね。『レン』は男の

子だけど『リン』をモデリングしたからうちの味を良く知っている

んだよ。

舞：そうなんだ。

などといった会話が繰り広げられ、朝食を食べ舞は学校に行った。

第三話 永遠の形

この社会ではアンドロイドを外で見かける事はまずない。

法律でアンドロイドは区別がつきにくいという理由で家の外で動かしてはダメな事になっている。

一つ、八木家で動いているアンドロイドと販売用のアンドロイドと違う点があった。

それは心のプログラムが八木家のアンドロイドにしか入っていない事だった。

研究者である父親が『心』というプログラムの難しさ・不安定さを、以前の『ミク』の事件で嫌というほどわかったからだ。

それでも研究者のさが、いや、会社としての方向性だろうか、心のプログラムの開発はあきらめてなかった。

それでまた、モデルケースとして2体が八木家に来たのだった。

その2体は心のプログラムを入れられてあった。

喜怒哀楽、いろんな感情を持てるようになってた。

一定以上に感情が高まらない限り『心』がリセットされない造りになっていた。

実験は順調に進んでいるようだった。

『ルカ』が何か怒る、『レン』がそれに対して突っ込む。そんなコント仕立てを見て舞がよろこぶ。

うまい三角関係ができたなと父親は思った。

アンドロイドは家事など以外の時、充電・もしくは人間で言う睡眠（記憶の整理）の時間になっていた。

水が主体となって家庭用電源で水素と酸素に分け、それをエネルギーとして換え動いていた。

1年ぐらいが過ぎただろうか。

八木家のアンドロイドの不具合が多く見られる様になっていた。それは感情のコントロールの不具合だ。

よく心を閉ざすようになっていた。

父親は会社を上げて捜査した。

結果が出た。

結果は…物事の変化がなく、一定の回路が多く使われ衰退してきている…との事だった。

様はたまには違う刺激を与えないと『心』が正常に作動しないと…いう事だった。

しかし行動に移そうにも限度があった。

法律では都会の家の外でのアンドロイドの使用は禁止されているし、万が一、『心』が暴走しては何をするかわからない。

どうすればいいか父親は考えたのだった。

答えは出た。

田舎に引っ越す事にした。

田舎ならば多少のことがあっても大丈夫だと思ったからだ。

それは少し大胆な行動だった。

舞の体調は安定してた。

なので父親は行動に移す事にした。

舞は最初は戸惑った。

いつもの学校、友達と別れるのが寂しかったからだ。

父親は仕事の都合での転勤と言ってあった。

秋が始まる季節だった。

2044年9月。

八木家とアンドロイドとの田舎暮らしが始まった。

父親はクリンプトンを辞めた。

昔働いていた時のお金がかかりあったのと、とある事を考えるのに時間がほしかったからだ。

それは多分そうなるだろうなと思い描きながらの作業だった。

そんな事は知ってか知らずか舞は田舎暮らしで大はしゃぎだった。木々の葉は色付き、秋がこんなに綺麗な事を知らなかったからだ。見るもの感じる物全てが新鮮に見えた。

『レン』と『ルカ』は外へ出ていろいろと感じ取っていった。

それは前にいた都会では出来なかった事だ。

舞は歩いて3人でいろんなところに出かけたのだった。

そんな田舎の学校でも友達はいっぱいできた。

舞は普段から人一番明るく、学校の中でも人気者になった。

家では家族4人、楽しい日々が続くかのように思われた。

しかしそんな日は長く続かなかった。

12月近くになった。

アンドロイドは故障が続き、ついには2体とも動かなくなっていた。

舞はふさぎ込みがちになっていた。

これは父親が予想した通りだった。

『形あるものいつかは壊れる』と。

その2体のアンドロイドはクリンプトンへ修理に出した。

しかしもう修理不可能な状態までになっていた。

父親は修理を断り、自分の今している作業を続けるのだった。

そしてアンドロイドは動かなくなった…。

- それからしばらく経ったクリスマスの朝 -

眠いとおつぶやきながら居間に来た舞を見て父親は「舞に聴かせたいものがある」といった。

いままでクリスマスプレゼントらしき物をもらった事がない舞は驚いた。

舞：聴かせたいってなに？

父親：これだよ。

といいながらパソコンを開く父。

そして曲は流れた。

- それは今まで出会ったアンドロイド達の透き通った声によるクリスマスソングの合唱だった -

アンドロイドでは出せない、ボーカロイド専用の音声での歌だ。

舞は泣いた。

そしてその次の年の春。

父親は会社を立ち上げた。

今まで作ってきたアンドロイドの声をベースとした音声によるシンガーソフト『ボーカロイド』の会社『クリプトン』をだ。

そしてアンドロイドはそのボーカロイドとして形を変えて永遠に残っていたのでした。

「形あるものいつかは壊れる。しかし、形ないものは永遠に残る。」
… のかもしれませんね。

第三話 永遠の形（後書き）

この作品は数ヶ月前、ニコニコ動画で流行っていた『イヴの時間』に強く影響を受けて作った小説です。

他にも『クリプトン』のボーカロイドからの影響も強いです。

構想は何週間か前に決まっていたんですが、内容は書いている流れで思い浮かびました。

実際アンドロイドがいたらこうなるのかなーって思いながら書いた作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8904h/>

クリンプトン物語

2010年10月9日04時32分発行